

光と緑の風通信

発行/2011年1月25日 編集/福島県立医科大学看護学部 〒960-1295 福島市光が丘1番地 TEL024-547-1111 (代)

2010 Open Campaus

7月3日(土)に看護学部棟および講堂で、オープンキャンパスが開催されました。
今年もたくさんの高校生が参加しました!会場は満員です!



スケジュール

- セッション 1 ●学部・カリキュラム ●学生生活について(先輩学生からの話) ●平成23年度入試の概要説明
- セッション 2 ●模擬講義 ●講師:稲毛映子(ケアシステム開発部門)
- セッション 3 ●施設見学、体験コーナー ●教職員・学生による質問相談コーナー



看護にふれよう、 体験コーナー

生体看護学部 鈴木 幸恵

看護学部に入学したらどのような講義・演習が行われているのでしょうか。高校生がとても気になる点ではないでしょうか。今年も実習室に看護の体験コーナーが設けられました。部門それぞれが工夫を凝らし、体験

コーナーがとても充実したものにしました。また、参加した有志の学生が、積極的に参加した高校生に声をかけ、説明したりアドバイスしたりと先輩としての姿勢を見せてくれました。毎年なのですが、緊張の中にも興味津々という高校生の様子を見て嬉しく、また頼もしく思われます。今回の体験をきっかけに学生の皆さんも「看護」を深めて欲しいと思います。(すずき さちえ)



オープンキャンパスの 模擬講義を終えて

ケアシステム開発部門 稲毛 映子

今年のオープンキャンパスの模擬講義は「母子の健康を支える保健師の活動」と題して行いました。本学部では、卒業時に看護師と保健師の国家試験受験資格が与えられます。ところがその保健師について、学部で地域看護に関する科目などを学習している学生の中にも「保健師の仕事はイメージしにくい」という声を聞くことがあります。そこで、看護職を目指す高校生の皆さんに、少しでも保健師の仕事にイメージしてもらえればと思います。保健師の活動の紹介を中心にお話をしました。講義でもお話しましたが、保健師は、地域で

生活するすべての人々のQOL (quality of life=生活の質)の向上を究極の目的として、健康保持増進と疾病予防に寄与する活動を行います。看護の対象が病気や障がいをもつ人々だけではないこと、健康を保持増進する活動も看護の大きな役割であり、その活動の主な担い手が保健師なのです。ここ数年、看護学部のオープンキャンパスには300名を超える参加があったため、今年の模擬講義は講堂で行いました。普段の講義室での授業とは違い質問し難い環境だったかもしれませんが、保健師のことを知りたい、あるいは、健康を保持増進する活動に携わってみたいと感じていただけたなら、是非本学部に入學し学んでください。お待ちしております。(いなげ えいこ)

在学生

在学生の近況

大学に入学して

看護1年 小松本 美咲



私は、夏休みまで実家から通ってました。実家は、金谷川まで車で1時間30分くらいかかるところです。そのため、朝は始発の電車に乗り、金谷川駅から大

入学して、今思うこと

看護1年 五十嵐 美咲



私がこの大学に入学してもう9カ月が過ぎようとしています。ようやく大学にもなれてきました。大学の講義はグループワークなどが取り入れられているものもあり、自発的に考えることが大切なのだと感じています。看護の専門科目も段々と始まり、自分が看護職を目指しているという自覚も強まっているように思います。また、仲間と共にソフトテニスにも打ちこみ、勉強に部活動に充実した日々を送っています。

能動的に学べるようになりました

大学院1年 田村 達弥



大学院に入学して早9ヶ月が経とうとしています。3年ぶりの母校は学部生の頃に感じていたものとは違う知的刺激に満ち溢れています。本来、学部生の頃から感じ取っていなければならぬはずの刺激だとは思いますが、大学院進学を経て能動的に学ぶ姿勢を持っていた今だからこそ、よ

基礎実習を終えて

看護2年 大和田 ゆかり



この二週間の実習で初めて一人の方を受け持ち看護する立場となり、また、病棟での医療職者の役割や職種間の関わりなど看護師や医療職者の働く姿を間近で見ることができた。漠然と描かれていた看護師の姿が現実的なものとなり、改めて看護師へ魅力を感じると共に看護師の役割の大きさや看護の難しさを実感し今後の学びへの意欲にも繋がる機会となりました。

同窓会

同窓会の近況

同窓会会長に就任して

渡部 千尋



懇親会の様子

この度看護学部同窓会会長に就任させていただきました。ご挨拶に伺ったことになりました。7期生の渡部と申します。まだわからないことも多く、至らぬ点も多々あり、ご迷惑をおかけすることもあるかと思いますが、微力ながら精一杯務めさせていただきますので、よろしくお願い申し上げます。



同窓会の活動としては、隔月の定例役員会、年に一度の同窓会総会の運営、在学生に向けた就職説明会などが主な活動となっています。私自身、在学中に自分の進路について悩みを抱えていたところ、開催された就職説明会において、先輩方の貴重な体験談をお聞きすることができ、非常に役に立ち、運営してくださった同窓会役員の方々に感謝すると同時に、同窓会の存在の重要性を実感いたしました。

同窓生、在学生にとり、あってよかったと思える会にしていきたいと思っております。何卒ご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。
(わたなべ ちひろ)

卒業生

卒業生の近況

今、がん看護専門看護師として動き始めて

宮城県立がんセンター
がん看護専門看護師 松田 芳美



看護学研究科を修了し6年が経ちました。臨床に戻ってからは検査外来に勤務しながら看護師の教育に従事し、「がん看護専門看護師になりたい」という固い意志の元、科目等履修生として学び舎に戻り約3年間お世話になりました。がん看護専門看護師認定後1年、少し

はじめまして

総合病院福島赤十字病院
看護師 舟山 由美



はじめまして。第一期卒業生の舟山由美と申します。地域に根ざした看護を目指し、福島赤十字病院に入社し、早9年目となります。ご存知とは思いますが、福島赤十字病院は急性期病院であり、災害看護や救急搬送受け入れに力を入れています。現在は、脳神経外科を中心と

ずつ存在を認知してもらおう事から始め、最近ようやく相談支援室配属となり組織を横断的に活動することの意義を模索しています。相談支援室を訪れるがん患者さんとご家族の多くは、治療や病期に関わらず様々な不安や困難を経験しています。背景には「IC (Informed Consent) 不足などの倫理的課題、ソーシャルサポート不足といった複雑な要因があり、がん看護専門看護師として、患者さんとご家族に寄り添い解決していきけるよう実践、相談調整、倫理調整の役割を担っています。常に keyword は、英国詩の講義で聞いた「チャンスは前髪で掴め」という言葉でした。在学生の皆様への夢の実現に生かさせていただけたらと願っています。(まつだ よしみ)

した病棟に所属しており、緊急入院や手術、急変が日常茶飯事の多忙な日々を過ごしています。また、医療の進歩、医療関係者の役割意識の変化、少子高齢化、価値観の多様化による看護師の役割の拡大に対応すべく奮闘しています。当病棟は固定チームナースングの形態をとっており、チームリーダーとしてチーム全体をまとめる傍ら、つい先日臨地実習指導者講習会を終え、臨地実習指導者として、実習生の指導にもあたるようになりました。責任ある仕事を任せられるようになり、緊張と疲労を感じながらも、充実した毎日をおくっています。
(ふなやま ゆみ)

人々が求める 「ホリスティックケア」とは



生態看護学部門
荒川 唱子

目を向けて働きかけていくことを意味する。これが健康に関連しているから、状況をホリスティックに捉えてナーシング「看護」していくのである。看護そのものはホリスティックでなければ成立し得ないものであると考えている。

「ホリスティック医療」や「ホリスティックケア」という用語は、日常的によく使われていると思うがいかがだろうか。そういえば、「ホリスティックナーシング」という言葉もある。このホリスティックナーシングの意味を筆者に言わせてもらえたら、それは看護そのものを最も適切に言い表した言葉であると言いたい。その意味をひも解けば、ホリスティックとは「全人的」、「統合的」などと訳されている。つまり、人間を「身体」や「心」といった部分に切り離して捉えるのではなく、あるがままにその人全体を見ていこうとするものである。たとえば、病んでいる人間をみていく時、その人が病んでいる身体の部分のみに焦点をあてるのではなく、その部分も含めた人間をまるごと、しかもその人間が環境と相互作用している実情そのもの

このような全体的な捉え方をされてケアを受けることは、多くの人々が望んでいることのように思える。というのは、ミクロに切り刻まれるのではなく、あるがままの状況で優しいとか嬉しいとかの感情をそのまま抱きつつ医療者から把握されてケアを提供されるのであるから願ってもないことなのである。このようなケアを提供できるために、医療者はホリスティックの意味を理解し、そのようなケアがどれだけ患者や家族にメリットをもたらすかを理解したうえで、そのようなケアを提供するように努めなければならないのである。医療を受ける人々が望んでいるケア、それがホリスティックケアであり、それはケアを提供する者にとっても望ましいものなのである。しかし、そのようなケアを提供することは容易ではないからこそ、常に目指す方向として掲げられるのかもしれない。

(あらかわ しょうこ)

「ホスピタリズムを克服するための 精神科看護師の学び直し教育プログラム」を 実施して

ケアシステム開発部門
大川 貴子



文部科学省の「社会人の学び直しニーズ対応教育推進プログラム委託事業」として、平成20年度より始めたこのプログラムも、最終年度となりました。精神科の病棟の中には、「どうしてこの方はずっと病院で生活しているのだろう」と思う長期入院の患者さんが多数いらっしゃいます。患者さんの生活状況や思いを把握し、地域生活への移行に際しての職種である看護師が、学び直しの機会を通して力量を高めることで、このような状況を変えていくことができるのではない

かと思い、企画しました。受講生延べ50名の方は、講義や演習を受講したり、事例検討会に参加したり、受け持ち患者さんへのケア計画や実践をレポートにまとめて提出したり



ができるのではないかと思います。セミナーや事例検討会は、大学と、県中、県南、浜通り、会津にある病院とをビデオ会議システムで結んで、各会場からも参加できるようにし、受講生以外にも多くの医療・福祉職の方にご参加頂きました。本年2月には最後の事業となるセミナー「再考―患者さんの権利は守られている?!」を計画しています。このセミナーは、福島大学で社会的弱者の権利擁護に関する学び直しプログラムを展開されていた先生方と共に、昨年の夏より「学び直し懇談会」を開催し、共同企画したものです。委託事業としては終了年を向かえますが、この事業を通じての人との繋がりがや得られた機材を活用して、さらなる展開を考えていきたいと思います。

(おおかわ たかこ)

編集後記

前号の新緑の時期から時は過ぎ、冬の季節を迎えました。皆さんは、どんな日々を過ごしましたか？

私たちを取り巻く社会は、看護界も含め加速度的に変化しています。目まぐるしい変化に日々追われ、時が流れていくと感ずることもあります。時間がかけて木々が色づき

実を結ぶように、皆さんそれぞれが、実りのある時間、季節を彩ってほしいと願っています。

最後に、お忙しいなか寄稿いただいた皆様に深く感謝を申し上げます。

(ばば かおり)

【編集委員】

林 正幸、横田 素美、中山 仁
大川 貴子、福島 直美、星野 聡子
馬場 香織、鈴木 幸恵、渡邊かおり